

## 第2期第2回中野区自殺対策審議会 議事録

日時 令和4年5月30日(月) 19:00～21:05

会場 中野区保健所 別棟

出席者(敬称略)

### 1.出席委員(14名)

大塚 淳子、白川 毅、小林 香、濱 玉緒、小松 美和、吉成 武男、筒井 嘉男、井上 直之、丸山 和也、松田 和也、秋元 健策、齊藤 光司、遠藤 純子、曾我 竜也

### 2.欠席委員(1名)

澤根 勝彦(代理:増井氏)

### 3.事務局(4名)

保健所長 佐藤 壽志子

保健予防課長 鹿島 剛

障害福祉課長 河村 陽子

中部すこやか福祉センター地域ケア担当課長 阿部 正宏

## 【議事】

### ○事務局

それでは、お集まりいただいた皆様、定刻になりましたので、ただいまより第2期第2回中野区自殺対策審議会を開催させていただきます。

この審議会は、委員の過半数以上の出席、8名が必要ですが、本日、14名の方に全員出席していただいておりますので、この会議は成立をいたします。

審議会の運営につきまして、審議会は中野区自殺対策審議会条例第6条の規定により、個人情報保護などの特別な理由がなければ、積極的に公開し、透明性を確保することが原則となります。ご異議がなければ原則公開とし、傍聴も認めたいと思います。

また、議事録につきましても、公開ということをお願いいたします。しかしながら、個人情報に関わる公開を控えたほうがよい情報につきましては非公開として扱いますので、ご発言の前にお申し出ください。

なお、議事録の作成のため、審議内容を事務局が録音することに関しましてもご了承願います。

それでは、まず初めに、新宿公共職業安定所及び中野区立小・中学校長会において委員の変更がありましたので、委嘱及びご紹介をさせていただきます。

新宿公共職業安定所の長谷川委員の辞任に伴いまして、新宿公共職業安定所職業相談部長、井上 直之委員にご就任いただきました。

続きまして、中野区立小・中学校長会の佐藤委員の辞任に伴いまして、中野区立小学校長会、中野区立啓明小学校長、遠藤純子委員にご就任いただきました。

最後に、中野区立中学校長会の松田委員の辞任に伴いまして、中野区立中学校長会より、中野区立第

二中学校長、曾我竜也委員にご就任いただきました。

以上3名の委員に、令和4年5月24日からのご就任をお願いしております。

新たにご就任された委員より、ご所属、お名前、ご専門等のご紹介をお願いいたします。

まず、井上委員よりお願いいたします。

#### ○井上委員

ハローワーク新宿の井上と申します。よろしくをお願いいたします。

職業相談部という部分でありまして、その名のとおり職業紹介の部門になります。ハローワーク新宿ということですが、管轄がありまして、新宿区、中野区、杉並区というところで参加をさせていただいております。よろしくをお願いいたします。

#### ○事務局

よろしく申し上げます。

次は、遠藤委員、よろしくをお願いいたします。

#### ○遠藤委員

皆様、こんばんは。啓明小学校校長、遠藤と申します。この春まで実は中学校に勤務しておりまして、小学校に来たばかりですけれども、皆様のご指導のほど、どうぞよろしくをお願いいたします。

#### ○事務局

申し上げます。

では、最後に、曾我委員、申し上げます。

#### ○曾我委員

皆さん、こんばんは。中野区立第二中学校校長、曾我と申します。3月まで大田区で勤務しておりまして、4月から松田校長に代わりまして中学校校長となりました。よろしくをお願いいたします。

#### ○事務局

よろしく申し上げます。

大変ありがとうございました。

続きまして、事務局側のメンバーの変更をお伝えさせていただきます。

私、今年4月に保健予防課長に就任いたしました鹿島と申します。よろしくをお願いいたします。それ以外の事務局につきましては、昨年度からの変更はございません。

それでは、私の議事進行役はここまでとさせていただきます、大塚会長に議事をお渡ししたいと思います。大塚会長、これからの進行をよろしく申し上げます。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

それでは、僭越ながら、会長を拝命しております大塚と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。次第に沿って進めてまいりたいと思います。

まだ残念ながらマスクがとれない状況ですが、暑くもなってきましたし、皆さんうまく調整しながらと思いますが、聞き取りづらくないように意識して声を出したいというふうに思います。よろしくをお願いいたします。

初めてご出席の方もいらっしゃると思いますので、少し経過を軽くご説明させていただきます。

当審議会は、平成31年5月に中野区長の附属機関として設置されております。第1期は、区長から当審議会に対して、中野区自殺対策計画の策定に当たっての基本的考え方、そして同計画に盛り込むべき事項等についてということが諮問をされました。答申及び中野区自殺対策計画（素案）についての審

議を行って、計画素案をまとめております。今回、第2期になるわけですが、区長より、当審議会には、中野区自殺対策計画の改定に当たり、次期計画の基本的な考え方、それから盛り込むべき事項等についてというのが諮問されております。令和6年4月に発表予定になります。今4年ですからまだもうしばらく時間がございますので、今現在走っている計画の進捗状況の確認と併せて、次期の計画策定というところで動いていくことになろうかと思っております。そういったことを諮問されておりますので、引き続き皆様にはこの自殺対策計画改定に向けてのご意見、その基になるのは進捗状況の確認ということになろうかと思っておりますが、ご意見、ご検討、ご協力をいただけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

では、続きまして、事務局から、早速、配付資料のご確認をいただこうと思っております。

### ○事務局

まず、お手元に配付しております資料の確認をさせていただきます。

資料1から8のタイトルがございます。不足のものがございましたら事務局までお申しつけください。1から8まで、資料1は委員会、それから事務局、メンバー表。2はスケジュール表になります。それから、3、中野区の自殺の現状となります。資料4、これは「年代別暮らしの状況と意識」という資料になっております。次が資料5になりますが、資料5は「中野区自殺対策計画成果指標と目標の達成状況」といった資料になっております。これが3枚。資料6が新規事業、自殺対策メール相談事業という資料になります。資料7、新規・拡充事業一覧ということになります。資料8が自殺対策関連事業実績というふうになります。皆さん、おそろいでしょうか。

### ○大塚会長

ありがとうございました。

それでは、既にお読みいただいているとも思いますが、詳細を事務局からご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

### ○事務局

それでは、事務局より説明させていただきます。まず、資料2をご覧ください。

令和6年度4月に東京都は新しい計画に向けての改定のスケジュールを示しております。中野区の動きとしては、今回の第2期第2回では、中野の最新の施策の状況、新規事業、計画に掲載されている目標の達成状況を確認し、計画の体系に盛り込むべき考えや意見を幅広くいただきます。第3回は、いただいた考えやご意見を基に計画の骨子をお示しし、それを基に検討を行っていただきます。並行して答申内容の審議も行っていただきます。第4回は、計画の素案、答申案の最終確認を行っていただきます。東京都は、中野区より1年早い令和5年に改定した計画を公表予定で、それに向けて、計3回の計画評価策定会議が予定されております。区は、7月に新たな自殺総合対策大綱を公表予定で、区としても国の大きな指針と整合性を図りながら計画改定を進めてまいります。

続きまして、資料3をご覧ください。中野区の最新の令和3年統計から見た自殺の状況、右下にスライド番号がございますので、スライド番号を示しながら説明いたします。

スライド2・3は、中野区、東京都、国の自殺死亡率についてです。中野区は令和2年に一時的に高くなりましたが、令和3年は17.9と令和元年の水準に戻ってまいりました。

スライド5は自殺者数の実数の棒グラフ。昨年は男女合わせて60名でした。

スライド6から9は、全国、東京都の令和2年・3年度自殺者数の実数の比較です。

スライド10は、中野区の令和2年・3年の自殺者数の実数の比較で、女性の40歳代で微増が見られるものの、男性、女性とも横ばい、または減少傾向となっております。

スライド 12 は、2016 年から 2020 年の 4 年間の自殺者数の累計の上位 5 位です。いずれも男性で、20 歳代から 50 歳代と仕事があり独り暮らしが 1 位、2 位、40 歳代から 50 歳代の仕事・同居者ありが 3 位、40 歳代、50 歳代、それから 20 歳代から 30 歳代の仕事がなく独り暮らしの方が 4 位、5 位となっております。全体的に、男性の 20 歳代から 50 歳代の独り暮らしの自殺者が多い傾向があります。

ほかのスライドは各自お目通しください。

次、資料 4 をご覧ください。

20 歳代・50 歳代は区役所との関わりが薄く、コロナでどのくらい影響があったのか、どのようなことで悩みがあるのか、相談先はどのようなところがあるかなど生活の実態が見えにくいため、令和 2 年度に中野区が行った「暮らしの状況と自死に関する調査」の一部をお示しした資料です。この調査は令和 2 年 12 月から 1 月に行われ、15 歳以上 64 歳以下の中野区民を対象としたものです。有効回収数は 3,369 となっております。

2 ページ目にコロナの影響による収入の変化の割合が掲載されております。どの世代も 3 割から 4 割程度の方が収入が減ったと答えています。

4 ページは、年齢 5 歳刻みごとのふだん見ている広報、現在の悩み、相談しない理由のデータです。悩みに関しては、20 代後半から 30 代前半にかけて仕事そのものの悩みが多く、次いで経済的な問題となっています。やはり就業している世代のため仕事・経済的な悩みが多くなりますが、広報では中野区報の閲覧室もあるので、相談窓口などの広報などに積極的に活用できるということが明らかになりました。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

スケジュールと、それから中野区の自殺の現状ということについてご説明をいただきました。それぞれについて何かご質問とかご意見がありましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

秋元副会長何かございますか。

#### ○秋元副会長

昨年度、自殺者数が増えたということですが、令和 3 年度に減ったというところの要因についてはもう少し分析をされているかと思しますので、その予想というか、要因についても分析が進んでいるようでしたら教えていただければと思います。

#### ○事務局

令和 2 年度に下がったということでしょうか。

#### ○秋元副会長

令和 3 年度に下がっていますよね。

#### ○大塚会長

何か背景ということですね。もし何かお分かりになる範囲でありましたら。

#### ○事務局

令和 2 年度から 3 年度にかけて増えているというのが 70 歳以上の男性、それから未成年と 20 代、30 代、40 代、60 代では減少していました。ただ、全体では減少ということなので、中野区の場合、特徴的な年齢はあまりなかったと認識しています。

#### ○大塚会長

全国的にも少しコロナ禍の影響もあり一時増えたのが今落ち着きつつあるとは言われているんですが、一昨年は著名な 20 代の方たちの連続した件でウェルテル効果が生じ若者が少し引っ張られました。

今回は著名な50代、60の男性がお二人続いたことがあります。その辺が今、東京都では50代がというところが増加しているというところもあって、一件落ち着いたかに見えるコロナのこの後に少しその辺りも見えてくるのか、どうなのかなという感じでしょうか。中野は一応全体的に横ばい、下がっているということですね。一方で、下の表のところ男性のトップがすごい目立ってしまっていて、ここはちょっと見ておいたほうがいいのかと思うポイントですよ。1位、2位、4位、5位が独居ですよ。孤立の問題とか見守りの問題とかがあるかもしれない。

ほかにいかがですか。スケジュールのこととかも含めて大丈夫でしょうか。特になければ一旦進めさせていただきます。

それでは、次の資料の説明をお願いいたします。

## ○事務局

資料5をご覧ください。

計画の成果目標及び目標の達成状況についてお示ししたものです。現行の計画は、基本目標1・2・3それぞれに成果指標、各取組に沿った事業ごとに目標が設定されています。分量が多いため幾つかの重要なポイントのみご説明させていただきます。

1枚目の上部に最も大きな成果指標となる自殺死亡率の評価を掲げていますが、昨年、令和3年度は17件という目標値に近い数字となりました。基本目標1には、自殺対策や自分の死に関わることと思うことや、自殺対策講習・講演会参加者のうち今後活用できると答えた人の割合が成果指標として設定されております。実績値はお示しのとおりです。

各取組に沿った事業については、記載をご覧ください。特に1枚目の裏側に記載されている担当者会はコロナの影響で開催を順延していましたが、遅ればせながら今年度6月に開催し、庁内、関係機関に関連する事業の進捗状況の確認、自殺対策についての各課の連携状況を再確認してまいりました。

2枚目の基本目標2をご覧ください。

取組の重点施策、また若年者対策の推進に挙げられた事業です。若年者向け普及啓発としまして若年向けミュージカルを実施しておりましたが、プレ講演を全国的に実施しようとしていた矢先にコロナが流行する中、ミュージカルという形式は断念、高校、専門学校、大学にDVDを配布するという形となりました。

3枚目の基本目標3をご覧ください。

こちらは、関係機関の連携や自殺対策推進地域ネットワークの強化の事業となります。

## ○大塚会長

区の成果指標及び目標の達成状況ということで今ご説明をいただきました。ここ最近はコロナで中止のイベントもあるのでなかなか難しいということがありますが、見ていただいて何かこちらについてのご質問とかご意見がありましたらお願いいたします。

皆様が直接関わられた何か事業とかがあって、補足のご説明があるようでしたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

では、2件続けて次の説明をいただこうと思います。では、お願いいたします。

## ○事務局

現行の計画の期間中も時代の変化や区民のニーズに合わせて実施した、新規や拡充事業を記載しておりますので、ご説明を行います。

資料6をご覧ください。

こちらは、保健予防課が所管課となる新規事業の自殺対策メール相談事業の内容、実績報告。この事

業は、インターネット検索エンジンと連動した広告を活用し、中野区内にて自殺に関するワードを検索したユーザーに広告が提示され、クリックすると相談専用サイトに移行し、メール相談を受け付けます。相談の内容により庁内各課に引継ぎが必要な事例については、常勤保健師が中心となり対応しております。

なお、本事業は、あくまでも自殺企図した人についてインターネット上でのパトロール機能を重視しているものであり、積極的に相談したい区民に対応するものではないため一般的な周知は難しいというところもございます。

令和2年度の4月から開始し、令和2年度の9か月間と令和3年度1年間の実績をお示ししているのでご覧ください。

1 ページ目下部に示している展開図は、相談につながったケースのうち、自殺を中断する、新しい相談先につながるなど、ポジティブな変化が見られた割合です。

2 ページ目上段をご覧ください。年代は20歳代から30歳代で、6割から7割の若者の自殺のゲートキーパー機能を担っていると推測されます。性別は圧倒的に女性が多く、コロナ禍で増加したと考えられる女性の自殺の対策にも寄与していると考えられます。

次に、資料7をご覧ください。こちらは、保健予防課以外の担当課や、中野区社会福祉協議会が新たに開設する対策事業の説明となります。

東中野に子ども・若者支援センターが開設され、18歳未満の義務教育終了後39歳までの若者のあらゆる相談に対応する窓口が設置されております。また、学校の分野では、スクールソーシャルワーカーが導入され、学区ごとに配置できることになりました。中学生からのメール相談も開始しており、貸与しているタブレットからアプリ経由で相談できるようにしたところ相談数が増加し、子どものいじめや自殺に絡む相談に迅速に対応する体制の一部が整備されました。

資料裏面をご覧ください。

関係機関の取組として、中野区社会福祉協議会が区の委託を受け、引きこもりの専用相談を開始しました。また、コロナ禍での社会的・経済的活動の変化の影響を受け、フードパントリーが開催されました。中野区の生活援護課もフードパントリーにあわせて生活相談を行っております。

資料8は、現計画に掲載されている関連事業の実施方法や計画の強化につきまして、分量が多いことから一つ一つの説明は省略させていただきます。

以上で報告を終わります。

## ○大塚会長

ありがとうございました。

今、新規事業のご説明をいただいて資料8の細かい内容、より具体的内容、こちらについては新規事業ということもありますのでぜひ補足説明をいただきたいと思っております。学校でのこの中学生対応のメールとかスクールソーシャルワーカーについて結構出ましたので、教育委員会の方々、学校の先生方、補足していただければと思っておりますが。

齊藤委員、いかがでしょうか。

## ○齊藤委員

では、資料7にございます、まずスクールソーシャルワーカー、これは対象が子ども、若者とはなっているんですけども、基本的には小・中学生が対象となっており、中学校を卒業してしまうと関わるのは難しいので、中学卒業までどこかにつないでおかないと危ないというような生徒もおります。

このスクールソーシャルワーカーなんですけれども、社会福祉士等の資格を持っている方々に入って

いただいでいて、子どものみならず直接家庭にも様々な支援を行ってもらっています。家庭訪問をしたりしまして、保護者の状況、家庭の中での状況などを把握して、必要な支援をしてもらえるような関係機関にきちんとつなぐこと。家庭が安定することで不登校傾向のお子さんが学校復帰だったり、または、学校に通うまではなかなかつながらないんですけれども、家から出て自分なりに居場所を見つけていくということで、将来の社会的な復帰に向けた支援を行ってもらうことを目的に配置しているものです。文科省のほうも令和元年度から中学校区に1名配置しなさいという目標値が示されまして、中野区は、9校の中学校ございますので、何とか人数だけは9人そろえました。ただ、月の勤務日数が残念ながら8日の方が多いものですから、十分な支援ができていくかというとなかなかそこまではまだ難しい状況もございます。ただ、本当に困っている状況の家庭、学校が一生懸命いろんなアプローチをしているんですけれども、しっかりとつながるといところまでいかないような保護者に対して、スクールソーシャルワーカーが上手に関わっていただいた結果、改善がみられたという成果はあると我々も認識しておりますし、保護者が安心感を持っているような相談をするケースがあり、効果が出ているかなと思っています。

続きまして、その下にございます中学生のメール相談です。これは令和元年度の9月からスタートしました。ただそのときは、ここに書いてあるように、まだQRコードからの読み取りということで件数としては本当に少なかったんですが、昨年度、1人1台のタブレットを貸与しましたので、中学生だけでも全員のタブレットにアプリを入れました。その結果、相談件数が非常に多くなりました。それほど重い内容の相談というのは本当に少なく、一、二件自殺まではいかないんですけれども注意して見たほうがいだろうという内容がありました。この相談アプリのデメリットとしましては個人の特長が実はできないんです。どこの中学校の何年生かというところまでは特定できるんですけれども、そこから先は学校の先生方に情報を提供して多分あの子だろうという想定で、そのメールを送ったということを先生方は知らないという状況でアプローチをしてもらって、最近何か困っていることがあったら必ず相談しなさいという呼びかけを全体にしながら上手に関わっていただくという対応を取っています。ですから、学校の先生方とすると結構難しいケースになると思うんですけれども、何かしらのアクションを学校側の先生方が起こしてくださることで子どもたちも相談しやすい体制だったり相談のきっかけになったりということで、これも効果としてはあるのかなと思っています。中学校は週に1日は東京都からスクールカウンセラーが派遣されていますので、うまくスクールカウンセラーにつないだりというようなことができるといいなと思っていますし、11月29日に移転しました教育センターのほうにも相談員が数多くいますので、そこに何とかうまくつないで、困ったことがあったら相談していいんだよということを学校のほうでも指導してもらっている状況でございます。

補足は以上です。

#### ○遠藤委員

では、その令和元年度からですけれども、実際にこれ「STOP it」というアプリを使って相談できるシステムだったんですけれども、生徒が相談するとすぐに指導室のほうからこの情報提供でということその内容について聞かせてもらっていました。ただし、今、齊藤室長からお話があったとおりに学年と性別までしか分からないんですけれども、内容については詳しく情報を提供していただいたので、どうも家の中でけんかをしたらしいとか、その中でいろいろ嫌になってしまっ死にたいという言葉が出たりとか、そうすると、じゃあ例えばお兄ちゃんとけんかをしたという情報が、当然上にお兄ちゃんがいる子だねということで、最近、様子もちょっとおかしい、心配な子はいないかなということでもまず学年に下ろせますので、その中でちょっとこの子は心配かなという子は大体ピックアップされてくるんで

すね。そういう子たちに、もちろん「STOP it」に相談したでしょうなんてことは言えませんので別の切り口で、最近元気ないんじゃないのみたいな感じで養護教諭であったり担任であったり学年所属の教員であったり、声をかけることによってぼつぼつ話し出すということでその全体像が分かってくるということが実際ございます。

#### ○曾我委員

4月に着任したばかりですが、メールの相談については本校でまだ案件が上がってはおりません。ただし、生活指導部会だったり教育相談部会というのが週に1回開かれますのでそこで情報が上がってくるんですけど、中学生なんでやっぱりリストカットが多いです。リストカットを発見してスクールカウンセラーにつなげて、最終的には自殺相談につながってという事例はあるんですけども、というところで自分でアピールをしてくるというようなところがあります。本来カウンセラーや担任に相談すればいいんですけど、やっぱり一番最初に発見するのは養護教諭ですかね、保健室にやはり子どもが逃げ込むというか、ちょっと疲れたので休みたいとか来るんですけど、取りあえずここで養護教諭が話を聞くとやっぱり手の傷を発見してというところですよ。やはり授業中とかには簡単に見せないんですけど、保健室で少し気が緩んだところで発見している、そこで担任、管理職に上がって、保護者連絡を取って対応というふうにはなっております。主な案件につきましては、カウンセラーから関係機関のほうへ連絡を取る、保護者と面談した後、関係機関と連絡を取るという形にはなっております、児相、子ども家庭支援センター、そこからSSW、あとは民生委員、保護司さんと、そういうところにもつながりながら子どもと家庭を見てというような状況が起きております。

コロナの影響はやはり3年目になって結構ございました。先ほどありました、収入がかなり減った家庭は子どもにもかなり精神的な影響が出ております。とても明るく元気だった子が急に暗くなったところを見ると、そういうところの影響が深く、ただ、子どもが家庭の収入が減ったということはなかなか分かりません。おうちどうと言ったら、お父さんが毎日いますとか、お母さんのパートがなくなりましたということは子どもは分かっているんですけど、お父さんがなぜ家にいるのかというところまでは子どもはしっかり背景までつかんでいないので、最初はいることがよかったんですけども、徐々に今度はいることによって夫婦げんかが始まって、家庭環境がそういった意味で、一方でご両親が家にいればいいんですけども、コロナの影響でお父さんがリモート等で自宅にいることによって夫婦仲が悪くなって子どもにその影響が出てきて、そしてリストカットにつながるという事例は件数としては増えていきます。

以上です。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

秋元委員、何か補足はありますか。

#### ○秋元委員

資料7の裏面に今回の新規・拡充事業について書いてありますので、二つの事業についてご説明させていただきます。

まず「ひきこもり相談支援事業」を令和4年度から中野区の受託事業として始めております。直近の統計では4月・5月と合わせて10件ほどのご相談がありました。以前から実は「福祉何でも相談」窓口で引きこもり相談がたびたび寄せられていました。どちらかというと対象者が中高年である方からの相談が多く寄せられてきました。ひきこもってしまったいろいろ要因を聞いていくと、学齢期にいじめに遭い不登校になってしまい、それからずっと引きこもりを続けているという方と、社会人となり仕事に



就いたのに1か月でやめてしまって、その後に就職をすることなく自宅にひきこもっている方がいる。このように、学齢期での「つまづき」と社会人となった際の職場での「つまづき」、大きく分けてこの二つが主なきっかけとなっているように思います。また、対象者の年代は20代の方から、上だと50代の方までいらっしゃいます。私どもで区民の方と協力して当事者の居場所である「カタルーベの会」を開催していますが、少しずつ参加者は増えてはいるものの、思ったよりも増えていない現状があります。その一方でひきこもりの子どもさんを持つ親の会の方への支援を続けていますが、参加者は予想以上に増えています。相談件数は10件と少ないのですが、6月以降こちら全戸配布の広報紙でPRさせていただきますので、かなり行き渡れば、実際にお困りになっているという方からのご相談が増えるんじゃないかというふうに期待しているところです。

次に、フードパントリーについてです。フードパントリーは食料の貯蔵庫という意味ですが、昨年度、町会・自治会をはじめとする地域の方々のご協力で生活にお困りになっている世帯へ食料支援を各区分活動センター単位で5カ所開催いたしました。

前回もお話しさせていただいたとおり、2020年3月より新型コロナ禍の中で減収し生活困窮となった世帯向けに全国の社会福祉協議会の窓口で「特例貸付」が始まりました。今現在も貸付期間は継続されており、中野区においては約2万6,000件の延貸付件数になっています。すでに限度額いっぱいのお金を借りても、その後も生活状況が変わらずに困窮状態に陥ったままの方も多くいらっしゃいます。生活困窮の課題は私たち区民の大きな「地域課題」の一つといえます。この生活困窮の課題について住民の方と一緒に取り組み、地域での助け合いの活動につなげるために、各地区に声をかけさせていただきまして、特に町会自治会の多大な協力をいただいて開催させていただきました。夏休み期間中に子育て世帯を対象に緊急的にお米配布会を行ったことも含めて790世帯の方に食料を提供することができました。実際に取りにいらっしゃる方を見ると、やはり母子世帯の方が多く見受けられました。協働で開催した区民の方もこの取り組みを通じて、生活にお困りの方、低所得の方、貧困にあえいでいる方が自分たちの住んでいる地域にはたくさんいらっしゃるということが実感してご理解いただき、「生活困窮の課題」を「我がこと」と考えていただく機会にできたのではないかと思います。また、このフードパントリーの際に必ず生活援護課の職員とホームレス支援を行っている団体の方と一緒に生活相談を行わせていただきました。毎回相談は数件ありまして、内容的には経済的な課題だけではなく、子どもさんに関する課題、悩みを持っていらっしゃる方が分かり、生活全般のご相談に対応するという状況になりました。フードパントリーについては今年度も少なくとも4回ぐらいは、地域の方、町会自治会の方と協力して開催をしていきたいと考えています。

以上です。

## ○大塚会長

ありがとうございます。

いずれも新規事業と子ども向けと、それから生活が苦しくなっている方向けということで、非常に大事なところが今始まっていてという感じを受けます。私は大学で精神保健福祉士も社会福祉士も養成をしているので、少しソーシャルワークの関連が増えたのは本当にうれしい限りです。でも、週に2日とか、スクールカウンセラーさんが入るのは週1ということなので、なかなかやっぱり先生方と連携をしないと難しいかなと思います。

今の新規事業、幾つかご説明、補足いただきましたけど、皆様のご質問、意見等がありましたらということで思います。

皆様がお考えいただく間に一ついいでしょうか。タブレットの件は公立中学校配置ということだと

思うので、東京都予算ということでしょうか。これは中野区の予算ですか？

○齊藤委員

はい、これは中野区の予算で、中野区の公立中学校の子どもたちだけです。

○大塚会長

他にもやっているわけではなくて、中野が進んでやっているわけですね。

○齊藤委員

そうです。東京都は東京都でLINEを使った相談をやっています。

○大塚会長

ちなみに、そうすると結構な台数だと思うんですが、小学生はやらないのはあえてデメリットとかお考えになって渡していないんですか。

○齊藤委員

いえ、タブレット自体は小学生にも、1年生から全員に配布はしております。

○大塚会長

アプリを入れているのは中学生。

○齊藤委員

はい、中学生のみにアプリは入れております。

○大塚会長

それは何か理由がありますか。

○齊藤委員

小学生のほうがそれほど相談がないだろうということがまず1点。もう一点は予算的なことがありますので、中学生を対象にまずはスタートしたということです。

○大塚会長

なるほど。

中学生にはもうアプリが全タブレットに設定がされているわけですね、

○齊藤委員

業者自体は同じなのですが会社名が変わりまして、ちょうど今設定をやっているところです。学年が変わったので、昔は「STOP it」という名前だったんですけど、今年度から「STANDBY」と名前が変わりまして、もう一度改めてアプリを全員入れてもらわなければいけないので、なるべく早い時期に入れたいと思っています。

○大塚会長

中学生は全部設定がされるので、相談したい子はぱっと使えると思うんですが、例えば小学生もアプリの周知をしていて自分で希望によっては使えるみたいなことはあるんですか。

○齊藤委員

特にはしていません。どうしても学校単位でアプリを入れるような形になっているので、直接というふうにはならないので、先ほど言ったスクールカウンセラーも週1回来ていること、それから心の教室相談員さんというのが各学校に配置をさせてもらっているの、何か困ったらそういう先生方だったり、あとは当然、普段からかかわっている担任なり養護教諭なりには相談をするようにと、SOSをしっかりと出すことが大事なんだという教育も併せて実施しているところです。

○大塚会長

ありがとうございます。

先ほどお話があった、子どもたちにいろいろ現れるけども実は親の収入減とかご夫婦間のDVとか、何か本人たちではないところに問題が潜んでいることもはあろうかと思います。そうすると学校とかスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーが頑張っても当該の大人のところのアプローチが難しくて結果が出ないような事例もあるのではないかなと思ったりしますので、またぜひその辺はおいおいお話いただければ有難いと思っています。

フードパントリーも、中野は本当に支援の団体がしっかりありますし、可視化が住民に向けてされているのはとてもいいですね。先ほど生活相談も一緒になさっているということで、子育ての相談とか、介護の相談とか、最近ですと女性の生理の貧困の問題ですとか、もろもろ医療相談とかあると思うので、ワンストップでどんどん広がればいいなと思って伺っていました。

何か、皆さん、委員の方からご質問とかご意見とかありませんでしょうか。

医師会の先生方とそういうところと組まれるとかね。

#### ○白川委員

児童相談所や教育委員の先生方との情報共有を通じて考えていくというようなところはありますね。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

たぶん政府も今、同じような方向で、最後は自殺対策につながるのだと思いますが、孤立とか孤独とか生きづらさを改善しようということで今いろいろ取り組んでいると思います。引きこもりの平均年数が19年とも聞いておりますので、なかなか大変と思いますが、また進めていただければと思っています。

それでは、次期計画に盛り込むべき課題についての意見交換というところに入りたいと思います。

まだ走り出して2年目のところで次期の計画を考えなきゃいけないため、大変ですが、もう動かないと間に合わないということです。今の新規事業とか取組事業とかお目通しいただいていると思いますので、新たな計画に盛り込むべき新たなこともあるでしょうし、もっと充実・強化をとということもあるでしょうし、もっと現実的に考えてと思うこともあるかもしれません。皆さんのご意見をいただきたいというふうに思っています。事務局からお話があったように、国自体が自殺対策大綱を新たにしようということですのでかなり短期のスパンで今国が動いてきているなという感じがしております。東京都の動きをにらんで中野の計画を考えていくことにはなろうかと思えますけれども、皆さんがぜひ現場でお考えのこととかお感じのこととか、ご自由にご意見をいただきたいというふうに思っております。お一人3分程度ぐらいでいければと思いますけれども、白川委員からお願いしていいですか。

#### ○白川委員

新規事業ですか、提案みたいになります。

#### ○大塚会長

新たに入れたほうがいいこと。

#### ○白川委員

それに関しては特になのですが、例えば子どもさんのお話でいきますと、現実問題、タブレットでやったりメールでやったりというものの効果みたいなものをどのように、実際、費用対効果じゃないですけども、効果に関することを総括的にやるべきじゃないかなというのは思いますね。例えばタブレットからメールを、子どもさんで家庭の収入が減ったから、とありましたが、実際感じるところは、少なくとも2年前の、先生方もお話しいただいていますけど、一斉休校をするのは果たしてどうだったのか

など。正直、私はそれに対して効果がよく分からないし、わたしは中学校校医をやっておりますが、個人的には必要であったのかなというふうに思うし。例えばマスクをしていると子どもさんの成長の中で表情も分からないし、ある程度、体育の時間だけはマスクを外すみたいなことになっているみたいですが、やはり現状の問題点は多数の因子が絡んでこういうふうになってくるんじゃないかなと私は思います。では、どうすればいいかというのはなかなか難しい、例えばこうすればいい、こういう授業すればいいだろうということを明確には言えませんが、少なくともこの2年以上を見て感じるのは、国の施策、都の施策、もちろん、初めてのことなので、いろいろ皆さん試行錯誤はあるのだろうけれども、少なくとも子どもに関してはやはり、喋らない、コミュニケーションを取れないという、それほどこの世代でも言えるかもしれませんが、それを何とかしなきゃいけないんじゃないかなという気が、最近はやっと緩和されてきているようですが、私もコロナ診療を連日行っていますが、今はどちらかという心の問題のほうに副作用が出ているんじゃないかなというのが正直感じております。そういう観点からも、やはりできるだけ早く正常な状態に戻していただくということが、それはなかなか…というよりも国がそういうことをもっと大きな目でやらなければいけないのではないかなという気はしております。収入が減ったというのも結局単なるコロナだけで、この資料に書いていますが、コロナだけの問題なのかというと、コロナがなくなつてそういう状況というのは絶対あると思うんですね。どのパーセンテージも書いてありますけれども。経済問題が長期になってきているというような状況を考えたりすると、コロナだけの原因かと、コロナの影響はもちろんあるのでしょうけれども、様々な因子を社会的に考えていかないと、一番あおりを受けるのは弱い立場のお子さんとか女性の自殺が増えていて、そこにしわ寄せは必ず来るんじゃないかなと思います。すみません。新規に何かこれという具体的なものはないですけど、私は個人的にそういうふうなことを考えている今日この頃です。以上です。

#### ○大塚会長

国とか都とか区とか新たなものをどんどん打っているけども、その打ったことのその効果はどうなんだという検証もしなきゃいけないし、現状の分析もちゃんとしなきゃいけないということだと思うので、今おっしゃった視点はとても大事だと思っています。大学でも、今年の3年生はずっとマスクで一回も顔を見ていないので名前と顔が一致しません。ずっと対面でやっていますけど、全く分からないですね。就職活動もオンラインでみんなやっているの、非常に課題はいろいろあると思っています。そこをきちんと分析しないまま新たなほうにどんどんやってもと思います。ありがとうございました。

引き続き、小林委員、お願いいたします。

#### ○小林委員

先ほど、中学生のリストカットがあるという話を伺ったんですけども、実数としては中野区で実際に自殺に至った20歳未満というのが令和3年度はゼロで令和2年度は3名で少ない感じはするんですけども、東京都で言うと90人ぐらい毎年出ていますね。この19歳までをひとくくりにするとうごくイメージが湧かないんですね。例えば小学生なのか中学生なのか、あるいは働いている19歳の子なのかということで全然違ってくるので、この辺がちょっと、せつかくそういうアプリまで入れていただいているので、実際に東京都ではどの辺で、中野区も他人事じゃないんで、東京都ではどの辺でどういことが起こっているというのを資料で出していただければ、うごくアプリの有用性とか、あるいはこの年代へのケアが必要なんだということを、中野の場合はゼロだからとかじゃなくて、未然に防げるのかなという気がしましたんで、ぜひ調べられればその辺を教えていただければと思いました。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

恐らく警察庁のデータで出されていると思うんですが、10代で括ると学生も働いている者も全部混ざるので、東京都にもぜひ分けて示してほしいとお願いしています。中野区の中で技術的にできるのであれば分析できるというなと思いますし、先ほどのデータで女性が自殺未遂がとて多いと上がってきているので、この辺りで何ができるかということかなどに思っています。資料の出し方でご検討ください。

濱委員、お願いいたします。

#### ○濱委員

医師会の先生がおっしゃったことはそのとおりだというふうに思います。この間、学校薬剤師もやっけていまして中学校に飲料水検査というのに行くんですけど、ちょうど運動会の時期で練習をしていて、マスクをつけたまま一生懸命リレーの練習をしている姿を見て、まだマスクってやっぱりつけているんですね、学校の中では、体育の授業も。ちょっと何かかわいそう、結構暑い日だったからかわいそうだなというふうに思って、今思い出しました。

それと、コロナで親御さんが職がなくなるとか収入が減ったことによってお子さんが暗い顔をしていらっしゃるというふうなものがあって、とにかくコロナが早く引いてもらえばいいのかなというふうに思いました。

中野区の5年間の資料の下の中で中野区の主な自殺者の特徴で、1位から3位までが有職の方で、4位、5位が無職で、有職・無職というよりやっぱり独居とかひとり暮らしというほうが自殺に対しては要因としてあるのかなということで、コロナと結びつけたらいけないと思うんですけども、有職・無職がコロナに直結するとも言えませんが、それは有職・無職じゃなくてひとり暮らしや独居というふうなほうが自殺には影響が大きいんだなと。ちょっとそんな感想ぐらいしか申し上げられなくて恥ずかしいんですけども、盛り込むべき考えというのはなかなか出せなくて、すみません。

以上です。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

有職・独居といっても例えば仕事が今テレワークなのか通っていらっしゃるのかも分からないのですが、仕事に朝行って、仕事から帰ってきて寝るだけみたいな独居だと、地域と全然関わりなくみたいな状況だと見守りも非常に難しいと思います。独居の方たちの地域とのつながりってどういうものかなと思いつながりながら聞いています。

小松委員、お願いいたします。

#### ○小松委員

既にご覧になったりホームページで見た方もいらっしゃると思いますが、都で2月に行われた自殺総合対策東京会議の令和3年度の主な自殺対策の取組についてお話しさせていただければと思います。

ここでは3段階に応じて、まず全体的予防介入、リスクの度合いを問わず万人を対象とする一般的な自殺予防啓発としまして、令和3年度は相談窓口に関する情報提供の拡充、職域向け自殺防止対策事業の拡充、都ホームページこころといのちのほっとナビの拡充、それからゲートキーパー普及啓発の拡充を行っております。それぞれ小中高生向けポケットメモを長期休暇前に配布したり、女性向け自殺防止の啓発物を作成したり、それから職場内ゲートキーパー養成資材を作成したり、広報を強化し、啓発動画を各種媒体で3月のキャンペーン時に放映しております。

次に、選択的予防介入では、自殺行動のリスクの高い人々に対する取組としまして、検索連動型広告の拡充として通年で実施したり、東京都自殺相談ダイヤルやSNS自殺相談の拡充として、時間や回線

の延長や拡充をしています。

個別的予防介入、過去に自殺未遂をした人など自殺行動のリスクが高い個人に対する取組としましては、自殺未遂者対応地域連携支援事業、東京都こころといのちのサポートネットの相談体制の拡充しております。

それから、ICTの活用としましてLINE相談AIチャットボットのころコンディショナー、オンライン、講演会等普及啓発を行っています。今年度になり予算案の段階になりますけれど、こころといのちの相談・支援東京ネットワークとして、経済情勢の悪化等による自殺リスクの高まりが生じている層などに対して必要な情報支援を迅速かつ確実に届ける取組を強化するために、ゲートキーパー啓発動画の周知強化、検索連動型広告の取組拡充の実施を考えております。

以上になります。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

小松委員は管轄として中野以外の区も幾つか持っていらっしゃると思うんですが、中野ではやっていないけどほかの区でやっているようなこととか、何か参考になることはありませんか？普及啓発、ゲートキーパー用研修とか、かなり動画とかもいろいろ研修ツールをたくさん東京都がつくっていらっしゃると思うんですが、それが行き届いているのかどうかとか、そういうお声とかその辺を少しお聞かせいただけるといいかなと。

#### ○小松委員

会議を所内分担していて、情報を持ち合わせておらず、そのようなものがありませんでしたら、またお知らせしたいと思います。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

#### ○事務局 佐藤所長

一つ質問してもいいですか。東京都の自殺未遂者の対策のところに力を入れるというか、例えば具体的にはどんなことをお考えなんでしょうか。

#### ○小松委員

今お話ししたのは令和3年度でして、令和4年度、今年度がどのようになるかは、まだ会議がこれから私のところにはまだなく、情報がありましたらお伝えできればと思っております。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。僭越ながら私が知っている範囲で、足立区もかなり進んでいると思っているんですが、九州の鹿児島市を参考にしたいと思います。自殺未遂者が救急対応で搬送されて、実際に救命救急とか救急に行って、入院は医療が面倒を見てくれるからいいんですけど、入院までは不要で帰りましょうという方がやっぱり不安要素が高いわけですね。そこを区内の精神保健福祉士と連動して、そこに合流してもらって一緒に家族の元に帰るとか、次のもともとの受診先につなげていくなどケアをする体制を組んでいたと思います。その辺は多分人の問題やお金の問題とか仕組みの問題があるので、そういうところを始めている区が若干幾つかあるというふうに聞いております。

ありがとうございました。

では、吉成委員、お願いいたします。

#### ○吉成委員

私は中野区町会連合会なんですけども、私どもは中野区に32万人いる中の105の町会で、中野区の

中でそのうちの5割の方が加入している団体でございますけれど、そういう中で中野区の見守り推進条例ということで、私たちは70歳以上の独り暮らし、あるいは75歳以上のみ世帯の名簿、または障害者、身体が不自由な方の名簿をいただいて、研修を受けて、その名簿を基に私たち活動しているのですね。そういう中で、今回この自殺審議会の中で若い方の自殺が多いという中で、私たちはなかなか若い人たちの、40代、50代の人たち、今日話を聞いているとそういう方が多いという話の中でなかなかつかみづらいということが、見えないというところが実際あることを考えています。そういう中で、今回の社会福祉協議会とともに地域でフードパントリーということで、今回5か所、近いところをやっていって、本当に私も南中野地区で参加して一緒に来る人を見てつくづく思ったんですけど、やはり見るからに本当に、見るからに見た目で言っちゃいけないんですけど、本当に大変かな、大丈夫かなという人がいたり、また、お子さんを連れてきている若い人、服装もちゃんとしている、あの人たち本当にどうなっているのかななんていうふうにいつも見ながら思うんですけど、やはりそういう40代、50代の人たちが例えばパートや何かで首になっちゃったり駄目になって、ああ、こういう人がいるんだなというふうに考えますね。だから、若い人がお子さんを連れ来ている、あの服装をして何でこういうような、こういうのってあれだけど、みんな来るのかな。私も南中野の地区で100人の予定で組んだんですけど、110個用意したら全部それを皆さんが持っていったんですね。ありがとうございます、ありがとうございますと、ああいうのを見ていると、やはり実際見た目じゃなくてパートでやっていて、その人たちが職を失って、例えば5万円、10万円の収入がなくなって苦労されているのかなというふうに考えますね。そういうところを救っていく、全部でなくても100人のうちそこに本当に困っている人が、5人の人が出るか分からないですけど何人かいる、その後、社会協議会に集う人たちが皆さんと相談しているのを見ていると、その社会福祉協議会の人とか…すごい荷物ですから、それを持って歩いていくんですね。そのときに相談しながら歩く、今度は違う仲間が行ってその後皆さんと相談している、ああいうのを見ていると、やはりああいうところで助け合えることができるのかなと、現実にやっているのを見ていると思いますね。だから、これからもできれば、それこそ社会福祉協議会も今年度もまた一生懸命やっていきたいという話も聞いているし、ぜひとも地域で我々町会連合会としてもしっかりと支えていきたいなど。やはり孤立・孤独いろんなことがあります。私が町会長をやっている中でも、一つコロナのところで、今まではご主人たちは仕事で出ていたのが急に自宅にいるようになったものから、自宅が昼間はどんな状況かというのは知らなかったんですね。ですから、私たち町会長の中でも、上の人がうるさいから何とかしてくれ、マンションで、そういう相談が来ているというのを町会長さん何人も聞いているのですね。だから、皆さんが今、本当にそういう中では初めての経験の中でふだんの生活が前と違うんだというところでそれぞれストレスが出てきている、だからそういう中でいろんな問題が起きているなというのは、実際、自分たちで分かりますね、そういうこと。うちにいても、うちは子どもたちが前と違う状況になっていますから、困っている人がいっぱいいると、そういう人を追い詰めないように、フードパントリーなどもこれからも続けてやっていただければありがたいなと思っています。

以上です。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

継続は力なりだと思うので、いろんな方たちが出会う場として大切なことなんだなと思います。一方で、若者の話もしていますが、どうぞ高齢の方の大変さもいろいろあろうかと思っておりますので、遠慮なくもしありましたらおっしゃっていただければと思います。

筒井委員、お願いいたします。

#### ○筒井委員

私、中野区民生児童委員協議会のほうから来ています。普段は、ちょうど今、高齢者訪問をやっているんですが、顔が真っ黒になっちゃって日に焼けちゃっているんですけど、今日は教育委員会のほうから来ていらしているのでもっとそちらのほうに聞いてみたいと思うんですけども。大変生意気なようなんですけど、今、学校の先生というのは昔と違って忙しいというか、ちょっとうわさに聞きますと学校の副校長なんかなるものじゃないというぐらいの、大変だというぐらいのを聞いているんです。昔の先生というのはいわゆる児童と本当にくっついてくれたんですよね。授業が終わって給食のときでも一緒になって食べていたのが、今はもう授業が終わったらさっと職員室に入っちゃって、これ特別かもしれないんですけども、ほとんど対話がないというような、そんなことをしていればやっぱり見えるものも見えなくなってくると思うんですよね。ちょっと自分で言うのもおかしいですけど、私はこの民生委員をやっている関係で児童館ですとか、あと小学校の毎朝の旗振りですとか、あと、地区委員会でもうこの年でも一緒にキャンプに行きます。子どもたちと仲よくなりますよね。そうすると、集団下校も一緒にやりまして、集団下校で1年生の子どもたちは中学校になっても向こうから挨拶してくるんですよ。だから、そのときも、一生懸命いろんなことを話したり面倒見て覚えていてくれたのかなという気がしますけれども。そうすると、例えば学校の先生でも常日頃接していれば、よく世間で言いますよね、ちょっとここにあざがあるとか、それから給食のときにおなかすかして異常によく食べるとか、何かそういう見えないものがそばにいれば見える部分があると思うんですね。例えば教室でもっていつも独りぼっちでいると、ということは友達がいないと、当然、学校なんか行くと面白くないですよ。やっぱり学校へ行けば楽しいということがない、何かそういうことをもっと早く学校の先生がキャッチしてあげれば解決できない部分が解決できるんじゃないかなと思うんですね。ですから、子どもにゆとりがなく、学校の先生も余裕があつて手があればもっともって防げるものも防げるんじゃないかなと思いますけれど。やっぱり忙しいですか、今。

#### ○齊藤委員

非常に繁忙です。尋常じゃないぐらいの残業をしています。月に100時間以上残業をしている人もいますので仕事は間違いなく増えていますし、やっぱり保護者対応やいろんな対応で時間と労力を奪われているというケースが多いです。教職を目指して教員になった方々は基本的には今おっしゃっていただいたような子どもと関わるのが好きで、子どものために何とか頑張りたいと思っている教員ばかりなんですけど、実際に教員になってみるとそれ以外の業務が非常に多い、少ない人数で多くの仕事をこなさなければならない状況です。教員定数は国が決めていますので、東京都が教員の配置数を決めているので、それ以上の教員は何かお金をつけて人を中野区でも雇ってつけているんですけど、今もう教員の成り手がいない状況です。東京都の教員採用試験を受けたいと思う人が少なく、倍率も全然上がらない状況で、これから先ずっと教員不足が続くんじゃないかなという事態を非常に恐れているんですけど、状況は厳しいです。

#### ○筒井委員

昔の先生というのは、例えば僕なんか悪いことをしていましたね、ぶたれますね、どうしてかという、それはおまえが悪いからだと言われたんです。今はぶたれたら親が怒鳴り込んでくるぐらいの時代ですからね。

#### ○齊藤委員

もちろん体罰は一切できませんし、子どもを殴るということはマイナスしか生まないんで、だからや



やっぱり家庭でももう少し温かくきちんと子どもたちを見守って育てていただきたい。昔の家庭は子どもたちに対して愛情をかけて子育てしていたというのは事実なのかなと思うんですよね。今なかなか子育てできないような保護者が多いので、保護者が育ってない、でも保護者にはなってしまうている、その子を育てたり変えていくためには保護者を変えないと難しいというような状況が多くあって、本来、学校がやるべき仕事じゃないことまで全部学校がやる状況になっているんですよ。

○筒井委員

最後は学校がいいとなってしまいうんですかね。やっぱり家庭にも問題があるんですね。

○齊藤委員

家庭だけの問題にして解決するようなものではないので、もうちょっと根本的なものを見直さない限りは何も変わらないと思います。

○筒井委員

ぜひ余裕のある状態に…。

○齊藤委員

そうですね。もうちょっと国の方でもリーダーシップを発揮していただけるといいなと思いますけどね。

○筒井委員

子どもたちが先生、先生となつくようなあれが一番理想ですよ。

○齊藤委員

そうですね。現状、間違いなくそういうふうにはなっています、学校は。子どもたちは先生のことが大好きですし、毎日楽しいと思って通ってきている子どもたちがほとんどだと思っています。その一方で、不登校の子たちが非常に増えているので、学校という組織というか、今まで当たり前だったことが当たり前じゃない時代にもなっているんだと思うんです。一つの枠の中にはめて、こうでなければならぬというような教育を、昔はやれていたんだと思うんですけど、今はもうそういうのを受け入れ難いと思っている子どもたち、保護者が非常に増えていますので、もっと多様性を認めたり、自由度を増やして生活できればいいと思うんですけど、学校以外の居場所というのをもっともつつくってあげることで、学校だけが学ぶところではない、学校以外のところで学ぶということも当然あっていいんだよということを社会全体も認めていく、そうすれば学校に行っていないことなんて全然マイナスじゃないというふうに考えられる子どもたちが増えてくればいろんなことが大きく変わってくるとは思うんですけどね。

○筒井委員

ありがとうございました。

○大塚会長

本当に学校の問題でもないし家庭の問題でもないし、地域の問題に全部してもいけないという、大分時代も変わって遊び方も子どもたちも変わってきているし、兄弟も少ないし、家族も少ないしということですよ。職場も和気あいあいの職場が少なくなりつつある感じなのではないでしょうか。時代が変わった中でどういうふうにこの対策を使っていくか、本当に今までの知恵では多分難しいんだろうなというところに差しかかっているんだろうと思いますよね。

すみません。井上委員さん、お願いします。

○井上委員

次期計画に求めているような話だったんですけど、ちょっとそこは私もこれはというところはないん

ですが、私たちの仕事というのが就労支援ということで、実際に窓口に相談された方で、失業のところともしかしたら結びつくかなと考える方がいらっしゃるかと思うんですけど、実際のところは就労意欲がある方というのはちょっとそこは結びつかないので、ほぼこういう相談になると話がずれていくということになるということはないんですが、やっぱり年に本当に僅かぐらいは過去にそうだというお話はあるんですね。うちに来ているからには就労意欲があるということで復活されている方なんですけども、そういう話があったときに、私たちもキャリアカウンセリングというのが仕事なので、それは何かというときにまさに傾聴ということなんで、そういうお話があれば話を聞くということしかできないのかなと、その後はいかに関連機関につなぐかというお話になると思ってやっておりますので、ただ、少なからず関連がある仕事をやっていますが、見るいろいろな事業をやっているということは分かったんですけども、私たちもじゃあどこにすぐつなぐのが一番いいのか、そういったところがせつかくやっていたらいいんだけどちょっと私たちにも分からないなと、一番いいところはどこなんだろうというのはちょっと分からないなというところがあるので、そんなところをもっと情報が行き渡って、難しいことですが、情報を行き渡らせるということは、ただ、中でも関連がある私たちがあまり分かっていないぐらいになってしまっているんで、周知というところですかね、そういうところがもうちょっと分かりやすくなればなというのはいちよと感じたところです。

**○大塚会長**

相談先のリストとかポスターとかが例えばハローワークの中にあるとか、皆さんのデスクにそういうリストがあるといいということもあるのかと思います。就労意欲がある人たちが相談に来るところでは、その人たちがうまく円滑に運ばばいいんですけども、つまりいたときとか、逆に先ほど男性の有職・独居の方たちが非常に割合が高かったですが、例えば中小企業の職場の皆さんからのご相談なんていうのはそちらには入るわけですか。

**○井上委員**

入らないですね。

**○大塚会長**

入らないですね。

**○井上委員**

求人という話はありません。

**○大塚会長**

幾つかまだつながるべきところがあるかもしれないということなんです。

**○井上委員**

そうですね。

**○大塚会長**

ありがとうございます。

では、丸山委員、お願いします。

**○丸山委員**

中野警察署の丸山でございます。よろしく申し上げます。

次期計画に盛り込むべき考えというのは我々のほうからちょっとあれなんですけども、私、警察官でございまして、自殺の関係もしかりなんですけど、先ほど出たDV、虐待というのも全て、私、生活安全課でございまして、全てが生活安全相談というくくりで皆様から相談を受けている部署でもあるというところでありまして。自殺に関しても、残念ながらお亡くなりになった場合は刑事課のほうの扱いに

なりまして、その前で終わった方という方は生活安全課で扱うというような形に警察はなっております。

いろんな方がいらっしゃると思いますけど、中には自殺未遂で終わったような方でも今、保健所さんに連絡をさせていただいて 23 条につなげるということもやっておりますし、全員が全員そういう、通報しても診察に至らない場合も多々ありますし、いろんなパターンがあるんですけども、もし周りの方でそういった困っている、特に夜間帯ですよ、警察は 24 時間やっておりますので、もしそんなのでお困りの方がいれば、お気軽にという言い方は語弊があるのかもしれませんが、どうぞ遠慮なく警察のほうに 110 番でもいいですし、直接来所されて相談されてもいいですし、また、関係の機関に我々のほうでつなげるというパターンもたくさんあります。ぜひ警察のほうも利用していただければというところであります。

私のほうは以上でございます。

**○大塚会長**

現場に駆けつけられるというか、まずその相談が入る窓口だと思うんですけど、警察は。そういう業務をされている中でここはちょっと何とかならないのみたいなことってありません。大丈夫ですか。

**○丸山委員**

例えば。

**○大塚会長**

例えば、もうちょっとこういうところを動いてくれたらいいとか、つなごうと思ったときにこういうふうにとかって。

**○丸山委員**

夜間帯ですよ、やっぱり。昼は皆さん、関係機関とかも地域でつながれる。夜間帯は、それはしようがないですね。

**○大塚会長**

主に夜間帯はどこにつながれるんですか。

**○丸山委員**

いわゆる東京都の 23 条通報でひまわりさんのほうに連絡をさせていただいて、昼間帯はこちらのほうにというような形になっています。

**○大塚会長**

そうですね。皆さん、ほとんど日中の機関ですものね。

**○丸山委員**

そうですね。我々は 24 時間やっておりますので。

**○大塚会長**

分かりました。お疲れ様でございます。

**○丸山委員**

いえいえ、そういう自慢をしているわけでもございませんので。

**○大塚会長**

ありがとうございます。

澤根委員、お願いいたします。

**○増井委員**

今日は澤根課長のほうがちょっと都合で、私、代わりに、課長代理の増井と申します。よろしく願いいたします。

警察のほうは、今、丸山課長のほうからおっしゃったとおり、私のほうでは特に言うあれはないんですけども、ただ、野方警察署管内、先ほどの資料のほうで確認させて、ほぼほぼ同じような自殺者の推移という状況で。ただ、実際にあった事案で、今年の春に若い女性の方が踏切に入っていってお亡くなりになったということがありまして、身元不明ということでしばらく捜査をしていたんですけども、ある日突然、10日ぐらいたってから、親御さんのほうからうちの娘がいないだけだということふうなことで行方不明届を出したいということでお見えになって、よくよく話を聞いたらどうも飛び込んだ女性の親御さんじゃないかということが判明いたしましたして、遺体のほうを確認していただいたらそのお父さん、お母さんは愕然としてしまったという事案がありました。なぜじゃあ分からなかったのかこれまで、というところなんですけども、実際にお亡くなりになった方は何も持たなかったものですから、DNAだとかそういった、前科前歴のある方じゃないので、一般の方ですので、その中で私が個人的に感じたのは、その方は一般会社にお勤めの方なんです。企業の方からも、会社のほうからも、うちの社員が出てこない、そういったご相談は全くなかったんですけども、聞いて確認したんですけども。だから、そういった企業の中でも、非常にまれでしょうけども、自分の社員に対しての無関心さ的なところもちょっと感じるのかな、あるのかなということも正直、私個人は感じました。ですから、企業ごとにはいろいろ対応策とか対応する方もいらっしゃると思うんですけども、そういったこともあって、ちょっと私個人的にはどうなの、これでいいのというような。追い込むというよりも、そういった企業ごとにちゃんとしたしつかりしたケアができる対応も必要のかなというようなところは、正直そのときの事案を取り扱って感じたところです。

以上になります。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

分かってよかったですね。

#### ○増井委員

そうですね。親元のところに戻してあげられたので、本当によかったと思いますね。

#### ○大塚会長

松田委員、お願いします。

#### ○松田委員

NPO法人リトルポケットの松田です。

私たちは精神障害者の方の相談支援を中心に行っているところです。今日の報告の中で資料8のこの自殺対策計画に関連する実績調査というのがありまして、これをちょっと見させていただいたんですけども、たくさんあるなということがまず第一印象です。その中でも、相談する、相談先というんですかね、それが様々ないろいろな機械を使ったものも含めてなんですけれども、大学さんともども含めてなんですけれども、いろいろ増えてきたんだろうなというふうに思っています。私は普段は中野区の地域支援生活センターせせらぎというところにいます。ここも1年間で大体相談件数1万を超えます。先ほど学校の方も言われていたようにその中には大変じゃない相談というのもありますので、ざっくり半分に割ったとしても五、六千件というのは深刻な内容だと思っています。

私たちがすごいやりながら感じているのは、この自殺ということに関してなんですけど、例えば無理やり、私たち病気のことをやっていますので、鬱病とかに関連させていくと、相談だけではどうにもならないなとちょっと考えています。それをこれに当てはめてみたときに、皆さんから相談を受けた先というのは、相談を受けた後どうしているのかなというのがとても気になっています。私たちのところも

体制で言うと、精神保健福祉士が大体 10 名、そしてピアサポーターといって病気の当事者の方が相談に乗っている、同じ立場で相談に乗るということをしています。また、そのほかに心理職の者が 2 人、週に 2 回、カウンセリングの時間を設けてやっています。今現状として 4 名の方がちょっと危ないんじゃないかなと思いつつも相談に乗っているわけなんです。ただ、この 4 名に対応しているだけでとても私たちは疲弊をしていくわけなんです。これが連続してとか長い間解決されずにいると、恐らく私たちのほうが病気になっちゃうんじゃないかと思うんですね。ちょっと疲れてきます。

国とか東京都もその先というのは考えていると思うんです。こうやって障害者の支援を考えていったときには福祉サービスがただできていっているわけですし、私たちは死なせないということと、次に病気の回復ということを考えてときに、次、例えば通所事業、ちょっと集団に入っていただくことを考えていくわけなんですけれども、これがまたつながらない。なぜなら、死にそうな方とか鬱病の重たい方というのはつながる力がすごく弱くなっているからなんです。そういうサービスはあるんだけどもそれにつながらないというところの支援というのを少し中野区でも考えていったほうがいいと思っています。そこで使えるものを新しくつくるというのがありますし、今あるものを何か工夫して改善して使っていくという方向もあると思うんですけれども、その辺をぜひ次回、この計画に入るかどうかは別として、ちょっと考えていく必要があるんじゃないかなと思っています。

以上です。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

月に 450 件ぐらいですよ。相談窓口にたどり着いてお話を聞いていただいただけで十分という方ももちろん中にはいらっしゃると思うし、その次にどこか紹介先につながっていらっしゃるという人もいらっしゃると思うし、ただそのつながる先がないとか、つながる先はあってもつながらないというところのものを考えたときの話ですね。人口は減っていますので、少ない資源をどう有機的につなぐかというところは、ぜひ次の回にそういう策が出てくるといいなというふうに思っています。

もう一回、今日は皆さんにお話しいただくのは何回目かですけど、ぜひ具体的に何かあればお出しただいて、なければないで、お願いします。

#### ○秋元委員

そうですね。さっきフードパントリーの話をしたのですが、自殺という生きづらさを抱えている人たちへの対応ということで言うと、さっきの自殺の多い上位の方を見たとしても、やはり社会的につながりが希薄だと思われる方が多いと言えるのではないかと思います。そして、それらの方々が地域の中でどうつながりをつくっていけるのか、どう支援していくのかを考えることが必要だと思っています。先ほど、町会自治会の多大なご協力を得たと言いましたが、私どもの会長でもあり中野区町会連合会の会長でもある吉成委員のご理解とご協力も得たことも大きな意味があります。当事者が住む地域の方へのご理解、ご協力がなくその「つながり」はできません。専門職がいくら頑張っても、日常生活の中で実際につながりをつくる、それをしっかりとした基盤とするためには地域の力が不可欠です。それをつなぐ役割のあるコーディネーターも必要です。そういう意味では、ゲートキーパーの役割も大切だと思います。

先程紹介させていただいたフードパントリーの財源は、地域の方からの寄付金で賄いました。60 万円の目標額が 240 万円を超える金額が集まったものですから、それだけ地域の方が何らかのきっかけがあれば「協力したい」という思いを持っている方が多くいらっしゃるのだと感じました。

あとは、関係機関との連携、支援の輪をどう広げていくのか、そのためには支援者が連携をもって取

り組むことが大切だと皆さんの発言を聞いて感じました。引きこもりの相談をやっている私たちだけで解決できるわけじゃないので、特に医療機関、保健師さんと関わることもいっぱいありますし、そういうときに当事者を囲む支援の輪を専門職と地域の方と併せて考えていくということがやはり必要です。そういう連携、協力関係をどう広げていくのかというところが、次期の計画の中で盛り込むべきところではないかと考えています。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

齊藤委員、最後にどうぞ。

#### ○齊藤委員

今日皆さんのお話を聞いていて、小・中学校時代にどんな関わりをしておくことが本当に必要なのか、ということをもう一度改めていろいろ考えなければいけないなと思いました。

先日、東京都の教育相談を担当している課長会がありまして、そこで話をしてくださった方が、もちろん自殺の数が多いのは40代から50代ぐらいの方なんですけど、小さい頃にあったいろんなことが実は影響しているといった話がありまして、先ほども引きこもりの方々はやはり中学校、高校とかで不登校になったとか、どの時点で会社を辞めたかみたいなのがありましたけど、もうちょっと中野区で自殺でお亡くなりになったような方々の、どこまで調べられるか分からないですけど、どの時点でどんな支援をしていたら本当は自殺という最悪の結果を生まないで済んだのかが少しでも見えてくると、それぞれのお立場の方々が、だったらうちで、こういう段階でこんな支援ができたのにとということが見えてくるのかなと思いました。

学校としてできることは、子どもたちが本気で何か頑張ったらできるようになったとか、人と関わることで多くのことを学んだとか、いろんな人とつながるってやっぱり楽しいことなんだというようなことをもっともっとたくさん経験させたり、そういう関わりの中で自己肯定感を高めていくことが非常に大切だなと思っています。これまでのこの2年間でコミュニケーションを取るような時間というのは本当に減ってしまっていたので、この2年間で小学生、中学生、または高校生だったりした子どもたちが、もともとコミュニケーションがあまり得意じゃない子どもたちが結構増えてはいますけど余計難しさが増えてしまって、何かにつまずいたときにもっとひどい引きこもりになってしまったりするんじゃないかな、いうことを恐れています。

あと、先ほどマスクの話も出ていたんですけど、運動するときはマスクを外しなさいと学校側から声をかけているんですけど、この間の土曜日でもかなり多くの学校で運動会があった際に、小学生でも3分の1ぐらい、もっと多いかもしれませんが、マスクを外せない子がいるんですよね。要するに外したほうがいいというのは子どもたちは分かっているんです。熱中症になっちゃうから、暑いからという理由から。でも、その外すということに対してものすごい罪悪感を子どもたちが感じてしまうような生活習慣を2年間させてしまってきているんですよね。ですから、もっと大人が道を歩くときに外す姿を見せてもらって外していいんだよということをきちんと示して伝えていくということをしていかないのかなと思っています。

本当に大変なのは多分これからだと思うんです。この2年間のコロナ対応の状況の分析というのを、私たちが持っているデータで学力のこととかいじめのこととか体力面でどうなのかという分析はしているんですけど、明確なコロナによる影響というのがなかなか見えてこないんですね。ただ、いじめられましたという案件は、友達と関わってトラブルになったという事案は減っています。逆に、何か陰で悪口を言われているんじゃないかとかというような不安感というのが増えているんですよね。そう

ということを見ると、子どもたち同士の関係性というのかなり変わってきてしまっているんじゃないかと考えます。これから先もっと心配なことが増えていってしまうのかなと思うので、少しコロナが収まったきたときに、次の手だてとしてどういうことを体験させなければいけないのかとか、どうやって子どもたち同士のコミュニケーションを図るような活動を取り入れていくかということをもっともっといろいろ工夫したりしながら進めなければいけない、そういうことをしっかりと今後のいろんな活動の中に盛り込まなければいけないなということを改めて今日は勉強させていただいたと思います。今日はどうもありがとうございました。

#### ○遠藤委員

新たなというところちょっと浮かばないんですけども、今お話を伺っていた中で現場のことで関わるのが幾つかありますので、お話しさせていただきたいと思います。

マスクなんですけれども、実はコロナになるもう前からマスクを夏でも外さない子どもっていました。顔を隠したがるんですね。あるいは、例えば男の子でももう目が出てこないぐらい髪の毛を伸ばしてたりして顔を出さない、表情を見せないという子がいたんですけども、引きこもり傾向があったりのか、なかなかコミュニケーションを取るのが難しいようなお子さんというのは大体こういうほわっとした髪の毛をしていたりしたんですけども、何か子どもたちの中で表情を見せたりすることに対して抵抗が生まれているのかなというのちょっと現場で今感じているところです。だから、顔を見られるのが恥ずかしいのかなという、外していいんだよということと言っても「いや、いいです」と、特に高学年ですね、中学生もそうなんですけども、というのを現場で感じています。

それから、この不登校傾向の子どもですけれども、やはり感じるのは、なぜかそのご家庭の兄弟みんな不登校。家庭の状況をなかなか、親御さん自身、エネルギーがあまりないなというご家庭が多いかなと感じます。いじめが原因で不登校になったなど、そういう例はすごく少なくなっていて、たどっていくともう既に小学校の頃から学校に行けなかったんだというお子さんが目立ってきていると思うんです。中学校の例なんですけれども、なかなか学校に来れない、それでも親御さんも出すエネルギーがない、それで担任が何とか学校に来させたい、学校に来ると何かしら活動ができるのもう朝迎えに行くんですね。そうすると、まだ布団の中に入っていてお母さんも起こせないから、おうちに入ってもいいですかと保護者の方に許可を得てお布団のところに行って、「さあ歯を磨こう」と歯を磨かせて、顔を洗わせて、服を着させて、という感じで学校へ連れてきたり、それから、何とかしたいなという担任の思いで一生懸命、先生たちも頑張っています。でも、お母さんにはなかなかエネルギーがなくて、だから多くの子どもをお風呂に入れるとか着ているものをお洗濯してあげるとか食事を用意してあげる、ごくごく当たり前かなと思われることがなかなか進まないご家庭も実際あります。そんな中で学校にできることというやはり限りがあって、例えばそういうご家庭の場合は、健やか福祉センターに連絡をして、夜、お母さんに会える時間に行ってもらって相談を始めたとか、あるいはもっと激しい家の中でいろいろあるご家庭に関しては児童相談所に間に入っていたりとか、それからDVの家庭に関しては警察の生活安全課のスクールサポーターの方に助けを求めたりとか、あるいは地域の民生委員の方にのぞきに行っていたりとか、学校だけじゃあもう全然身動きが取れないというか、やはりいろんな方のサポートをいただかないと回っていかないなという状況です。さっき学校の先生は忙しいですかという話がありましたけれども、そういうところの窓口になっているのが学校の副校長です。なかなか仕事が減らないというのが現実です。

#### ○曾我委員

今回は私からも発言させていただけると…。

今いろいろご意見が出ました。まず、先ほど、先生の話になって先生方忙しいというのは本当なんですけど、月 100 時間を超える先生が何人かいます。ただ、誤解してほしくないのは、その先生方が自分の仕事がブラックとか絶対言いません。すごく充実しています。逆にブラックと言う先生がいるとしたら、定時に帰っていく先生方ですね。それが逆行をすることが実はあります。100 時間越えの先生がブラックと言うことはほぼないですね。充実した学校生活を送っていて教師になってよかったという声が逆に聞かれるところがあるので、管理職の立場としてはすごく難しいですね。早く帰りましょうと言ってあげたいんだけど、すごく充実しているんだという答えが返ってくるのが実はあります。それが一つあります。

それから、先生方はすごく子どもにも家庭にもしっかり前向きに取り組んでいますので、そういうところが世間一般で言う学校の教員はブラックというところの体系はちょっと違うところがあるのかなというのは現場にいて感じるころではあります。

あと、白川先生の先ほどのコロナなんですけれども、ここまで来てしまうと、今まではマスクをしてしゃべってもいけないという状況だったので、マスクはしているけどもしゃべっていい環境をつくっていくしかコミュニケーションの取り方は今はないのかなという感じで受け取っております。これで、マスクが取れば、今までのような子ども同士の顔と顔を合わせた会話ができるようになってくるんですが、コロナで一番、私が見ている中でこの 2 年間の影響で一番変わってしまったのは教員かなと思います。教員のコミュニケーションが減りました。教員がチームとなって何か一つのことに取り組もうということがなくなったことが、コロナの一番のマイナスの部分かなという感じがします。それがかなり逆に教員同士のコミュニケーションが減るので、その影響が今度、子どもに返ってくる。仲の悪い教員がいると、生徒たちもその様子を酌み取ってしまってどんどん会話が減っていますしコミュニケーションが減っていると思います。というような状況というのが実はコロナの影響としてあるのかなというのが、今、校長をやっていますごく感じます。

何を一番感じるかという、今コロナが収束してきて行事が元に戻り始めてくるんですね。そうすると、昔やっていたことを知っている教員がほとんどいなくなってしまっているんですよ。例えば運動会一つにしても、じゃあフルバージョンでやろうとしたら、これどうするの、どういう手順でやるの、誰がやるの、どこに物があるのというところから今、我々が一生懸命考えているので、なるほど、そういうところでコロナの影響というのが教員にまず影響している、その教員のごたごた感が子どもにも影響しているのかなと、私は今、中学校の現状として感じております。そういうところを徐々に改正することができればいいのかなというふうには見てはおります。

あと、アプリは、行政系のアプリは子どもに導入するんですけども、それじゃあ子どもがそれを使うかといったら、正直、使わないです。子どもが使っているアプリは、自分の名前を明かさずに偽名でアプリに登録してバーチャルな人間との会話ですね。例えば、死にたいとかつらいとかいう相談する相手は、会ったことも見たこともない人間に一生懸命メール送信するんです。そうすると、それに同調した仲間がいっぱい集まってきて、あなた大変ですね、かわいそうだねという安心するんですね。でも、そこから警察にもつながりますけど、出会い系サイトにつながっていくわけですね。それで性犯罪につながるというのもありますので、アプリの使い方というものもなかなか今難しいところがあるのかなという感じがします。

それと、あと、すみません、自殺対策計画の新しい考え方という観点から考えると、すみません、初めて人間で素人なので申し訳ないんですけども、個人的に思うのは、先ほど言った中野区の自殺の特徴というところで 1 位から 5 位の全体数が下がったので、その方々をターゲットとした自殺対策の成果



指標というのが必要なのかなという感じがいたします。啓発するにしても講座を開いても、その方々が今、中野区に何人いて、その方々にちゃんと通知やメールが届いて、その方々が何人会に参加したということが一つの指標として出てもいいのかなというような感じは個人的に思います。広く一般にやっても来てほしい人は来ないというのが現状なのかな。学校の参観日をやっても、親に自分の子どもを見に来てほしいと思ってもそういうのは絶対にほとんど来ません。とても学校に協力的で真面目な親はちゃんと毎回100%参加してくれるんですけども、一番来てほしい人がその会に参加してくれないというのも現状としてありますので、この自殺対策も一番来てほしい人にどうやって取りあえずこの思いが伝わるのかなというところをこの成果指標に盛り込んでいけるといいのかなというのはちょっと素人ながら考えたところでございます。

以上です。

## ○大塚会長

ありがとうございました。

前回はそうでしたけど、何か我々は自殺対策がテーマなんですけど、実際に話し合うともう社会の大問題をいつも論じている形になりまして、仕方ないと思うんですが、本当に多岐にわたる課題が今山積している、各年代の課題がそれぞれにあるんだろうと考えます。今日は特に学校と引きこもりの方々の課題を中心に議論ができたかなという気がしました。

先ほど、齊藤委員がおっしゃった多分 TIC(トラウマ・インフォームドケア)の視点なんだろうと思うんですが、国の検討会レベルでデータがもう数年前から出ていまして、20代の後半から30代にかけて精神疾患を抱えている人は、実は65%が10代の前半までに、75%が10代の後半までに何らかの精神疾患的なサインを出していたことがあるというデータが出ているんですね。だけど、そのときに適切な対応がなされないままいろいろ生きづらさが継続しているのだと思います。そのサインをどういうふうにかッチするかというのと、時代が変わっている中でSOSの出し方、今も曾我委員がおっしゃいましたように大分かつてとは違いますので、そのSOSをどうやって酌み取るかというのが、松田さんもおっしゃったようにどこにつなぐのかとかいうこともありますね。これらを含めて次回の継続検討かなと思います。、引きこもりの方々のデータも引きこもっているので実態調査がほとんどされてこなかったんですが、数年前から大がかりなものがあって60万とか70万とか言われているわけです。3割の方が相談したい気持ちがあるけれど、3割の方は相談したくないということのようです。そのアンビバレンツな状況で、必ずしも病気ではないですし、非常に難しいところかなと思うし、実際、引きこもりに対応する支援者は少ないですし、悪徳業者もあります。陰湿ないじめが増えてきていることも含めて自殺の直前のところをどう防げるかというところにはいかに介入できるかということだと思います。最後に曾我委員におっしゃっていただいたように、途中でもデータの話もありましたけど、やっぱり国は国、東京都は東京都、じゃあ中野はというところを少しやっぱり丁寧に、中野はどこを重点的にということはやっぱり考えたほうがいいのかというふうに今日の皆さんのお話を伺って思いました。事務局は大変だと思いますが、次回はもう少し具体案が出てくると思いますので、皆さんの叩き方も意見の出し方ももう少しより具体的になると思います。毎回こうやってご意見や示唆をいただけますので、大変貴重な時間だったと思います。

それでは、残り5分ぐらいになりましたが、事務局から連絡がありましたらお願いします。

## ○事務局

それでは、委員の皆様、今日のご議論、誠にありがとうございました。お時間の都合上、詳しくお知らせできなかったとかご意見などございましたら事務局まで、どんな形でもいいので意見をお寄せくだ

さい。

なお、本日の審議会の内容は、議事録としてまとめ公表しなければなりません。公表前に議事録内容を確認していただきます。その際、議事録をメールで各委員に送らせていただきます。チェックしていただきます。郵送などメール以外の方法をご希望の方は、この後、事務局にお伝えください。

また、冒頭でご案内しましたが、資料3につきましては個人情報の特定につながってしまいますので、回収させていただきますので、お帰りの際は机の上に置いていただきたいと思います。

なお、次回、第2期の第3回開催日程は8月の下旬を予定しております。8月24日から30日の間を予定しております。時間及び場所については本日と同様で、19時から中野区保健所内、今日と同じ場所を予定しております。よろしく願いいたします。また、お近くになりましたら詳しい日程等を決定して皆様に周知いたしますので、よろしく願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。

#### ○事務局 阿部課長

事務局です。

申し訳ございません。資料1に訂正がございます。アウトリーチ推進担当課長という職名が廃止になり、今年度から地域ケア担当という職を拝命しております。複合化し、かつ困難度が高くなっていく地域保健の問題により強力に対応してゆくためこのように職名がかわりました。アウトリーチ活動も引き続き推進してまいります。今後ともよろしく願いいたします。

#### ○大塚会長

ありがとうございます。

今、阿部さんがおっしゃったように、国のほうも精神保健の相談窓口を市町村に下ろそうという検討が始まっております。何らかの生きづらさを抱える人の問題が身近なところに多いということだと思っておりますので、ぜひまた次回、皆さんのお知恵を聞かせていただければと思います。

今日はどうもありがとうございました。

(閉会)